

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

里島ツーリズム ～あるがままの心地よさ～ を活かした島づくり

受賞者 まつやま^{りとう}里島ツーリズム連絡協議会
(愛媛県松山市)
えひめけん まつやまし

■ 地域の沿革と概要

松山市は、愛媛県の中央部に位置し、東の四国山地を背に、西に瀬戸内海を望み、温暖な瀬戸内海気候である。明治22年の市制施行以来、県の政治・経済の中心都市であり、松山城や道後温泉など全国有数の観光地も抱え、俳人正岡子規をはじめとする多くの文人を輩出するなど地方文化の拠点としての役割を果たしている。

平成12年4月には中核市へと移行し、平成17年1月には北条市・中島町と合併して四国初の50万都市となり、市の地域資源の多様性も広がった。

また、伊予柑をはじめとする柑橘については、全国で最も多い栽培面積を誇る全国有数の産地であり、柑橘が中心の果樹の農業産出額は、県の果樹農業産出額の2割、市の農業総産出額の約半分を占めている。その他、県内一位の水稻や、ナス、ソラマメ、たまねぎ等の野菜の産出額が多い。

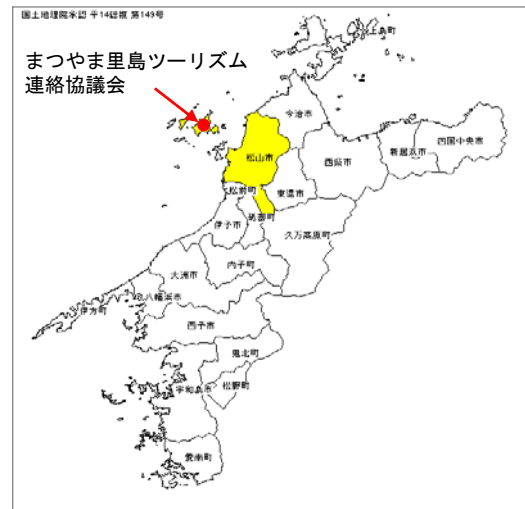
■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

松山市は、平成17年の合併により、松山市は従来の興居島、釣島の2島に加え、旧北条市から安居島が、また旧中島町から睦月島、野忽那島、中島、怒和島、津和地島、二神島の6島が加わり、美しい自然と個性豊かな島文化を持つ有人島9島（忽那（くつな）諸島）を擁することとなった。

忽那諸島は、近辺の海底が複雑な地形で潮流が速く、漁獲されるタイなど

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	旧町(9島)
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	39.2% 総世帯数 2,840戸 総農家数 1,113戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 683戸 1種兼業農家 120戸 2種兼業農家 149戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 4,487ha 耕地面積 1,330ha 田 6ha 畑 25ha 樹園地 1,299ha 耕地率 29.6% 農家一戸当たり耕地面積 1.2ha

の高級魚は身が引き締まって市場から高い評価を得ているほか、瀬戸内海特有の温暖少雨で日照時間が長いという柑橘栽培に適した気候条件を有し、伊予柑や温州みかんなどの全国有数の産地であることから、第1次産業が基幹産業（就業比率63.7%）である。

しかし、近年は柑橘類の生産過剰や消費者ニーズの多様化等により価格低迷が長期化して農家の経営は厳しく、魚価の低迷や燃料費の高騰により漁家の経営は厳しい。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 水軍にまつわる歴史

忽那諸島の中島を拠点に瀬戸内海で勢力を誇った忽那水軍は、平安時代後期に台頭し、香川県の塩飽諸島から山口県の屋代島まで勢力を広げていた。南北朝期には南朝方についた一族が勢力を拡大し、忽那水軍の黄金時代を築いたが、豊臣秀吉の四国征伐により滅亡したといわれる。

現在でも忽那水軍に縁のある史跡や文書などが残っており、島しょ部住民はその末裔であることに誇りを持って暮らしている。

イ お接待の心

興居島では、四国霊場88か所をお参りできない人々のための「島四国」という行事が江戸時代から続いている。毎年、弘法大師の命日と前日のお逮夜（たいや）にあたる4月20日、21日に大勢の巡拝者が島を訪れ、島民は島内の札所と巡礼コースで食べ物などのお接待（おもてなし）をするものである。



写真1 興居島の島四国

また、昭和61年に四国で初めて開催され、平成25年で28回を数えるトライアスロン中島大会は、ボランティアに支えられた手作りの大会として知られる。大会運営やコースの給水ポイントでのお接待など、島民総出でこの大会を盛り上げている。島しょ部は宿泊施設に限られるため、選手は島民の自宅にホームステイをしており、そこで島民と参加選手やその家族との交流が生まれ、競技愛好家の間で好評を得て、年々参加者が増加している。

ウ 島しょ部活性化の提言のとりまとめ

高度経済成長期には2万人を超えていた島しょ部の人口は、基幹産業の不振等から島外への流出が続き、平成17年には約7千人にまで減少し、高齢化率も50%を超えるなど、過疎化、少子高齢化が著しく進行している。また、市町村合併により、「自分たちは忘れ去られてしまうのでは

ないか」という危機感や不安感を多くの島民が抱くようになっていた。

そのような中、市が主宰する住民主体のまちづくり研究会「みんなのまつやま夢工房」（以下「夢工房」という。）において、平成17年に「島しょ部の活性化」をテーマに議論することとなった。

都市部と島しょ部が共生する新たなまちづくりを模索し、そのために必要な課題を解決するため、島民や公募された市民が中心となって、約半年をかけて延べ十数回にわたる協議や視察研修、実践活動を行い、36項目の提言を取りまとめた。

そして、提言に基づき、市をはじめとする関係機関が活動を始め、島民からも「自らできることは取り組んでいこう」との声が挙がり、夢工房に参加した島民が中心となって松山離島振興協会（以下「振興協会」という。）を平成18年4月に設立した。

エ 「しまはく」の開催

振興協会の目的は、グリーン・ツーリズムやブルーツーリズムなどツーリズム活動等の企画・実施、特産品の開発・販売、自然・生活環境の整備、定住の促進、情報の発信等による島しょ部の活性化であった。振興協会は、「島づくり」「地域産業」「観光振興」の各部会を設け、市等の助成を活用しながら取組を進めた。

そんな中、36の提言の一つでもあった「島しょ部を舞台にした博覧会・松山島博覧会（以下「しまはく」という。）の開催」を実現するため、各島の代表者や関係者をメンバーとする実行委員会を平成20年に組織した。しまはくは、訪れる人々に様々な体験を通じて豊かな自然と美味しい食べ物、独特の文化や歴史といった島の魅力を知ってもらい、楽しんでもらうことで、島の活性化を目指す取組である。

しまはくの実施に当たって、開催を提案したのは島民以外の市民であったが、その提案に触発された島民が中心となり、市職員など関係者と共に準備を始めた。そして、しまはくは平成21年の試験開催を経て、翌22年の春から秋にかけて開催された。

島民は創意工夫を凝らして、地引網やみかん狩りなどの農漁業や、ウォーキングやクルージングなどの自然を体験するメニューをつくり、島の「ありのままの心地良さ」を訪れた人たちに体感してもらった。しまはくの実施によって、島民が交流による「活力ある島づくり」に取り組むきっかけや自信を持つことつながり、それぞれの得意分野を活かしながら連携・協力して交流に取り組む下地ができた。



写真2 地引網体験

オ まつやま里島ツーリズム連絡協議会の設立

しまはくの取組を一過性のもので終わらせず、継続かつ充実させると

ともに、食や文化、体験等を通して都市住民との交流を促進し、特産品の消費拡大を推進して地域の産業振興を図り、自らの自立と地域の活性化を目指すため、「まつやま里島ツーリズム連絡協議会」（以下「連絡協議会」という。）を平成23年4月に新たに設立した。

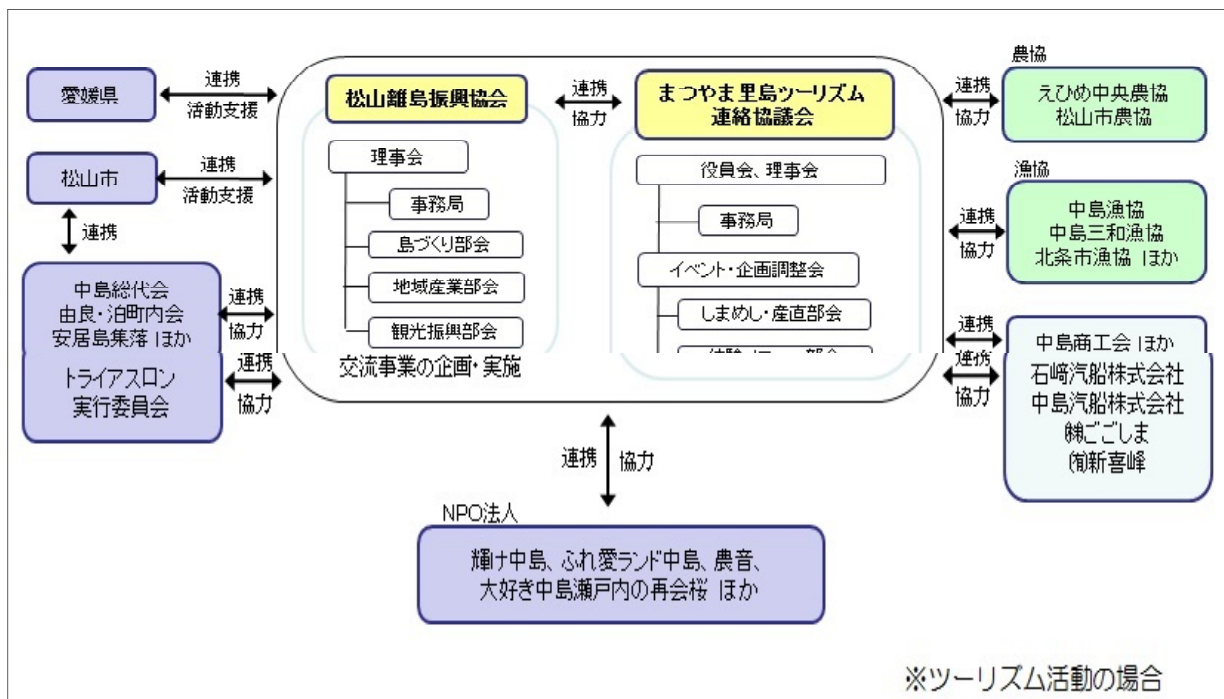
「りとう」は「離れた島」ではなく「ふる里の島」であるという考えから、様々なイベントや体験メニューを「里島（りとう）めぐり」と総称して提供している。

（2）むらづくりの推進体制

ア 地域が一つになったむらづくりの組織

忽那諸島における島づくりは、ツーリズム活動等の企画・運営、特産品の開発・販売、農漁業などの産業振興、自然・生活環境の整備、定住の促進、情報の発信等島しょ部の活性化を目指す取組を、島しょ部で活動する様々な組織・団体が役割分担をしながら進めている。

第2図 むらづくり推進体制図



イ 活性化の要、ツーリズム活動

むらづくりの大きな柱である交流による活性化を目指すツーリズム活動は、振興協会と連絡協議会が中心となって行っている。特に、連絡協議会のメンバーは、しまはくを契機に誕生した体験メニューの実践者である。

連絡協議会は、商品開発やイベント出店などを担当する「しまめし・産直部会」、新規体験メニューの開発や旅行商品化を担当する「体験メニュー部会」、民宿経営者らによる体験メニュー付宿泊プランの開発や

接遇研修等を担当する「しまの宿部会」を設けて、「里島めぐり」を展開している。

里島めぐりの体験メニューは、①農家や漁師の指導を受けながらのみかん狩りや地引網などの農漁業体験、②豊かな自然を活かしたホテル観察や島内ウォーキング、離島クルージングなどの自然体験、③島の特産品を活かしたみかんジュース搾りやピザ教室、海鮮料理などの食文化体験、④日常生活を離れた島での石絵作り、瞑想、農家漁家民宿などの文化・創作体験の4のタイプに分類される。



写真3 里島めぐりのパンフレット

どのメニューも、島民の創意工夫により誕生したもので、島民も無理をしない身の丈に合った内容となっている。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

基幹産業の落ち込みや市町村合併による不安の中、島民は、市からの呼びかけによって島外の市民や行政とともに島しょ部活性化について考える機会を得て、活性化のための提言が取りまとめられた。

そして、自らも活動するための組織を作り、豊かな地域資源を持つ島を舞台とした「交流＝ツーリズム活動」を活性化の重要な手段と考え、提案の一つであった「しまはく」の開催を実現した。

また、しまはくの取組を一過性のイベントで終わらせまいと、新たに組織を設立して、ツーリズム活動を継続かつ充実させている。その活動の中で、島の魅力に触れて島外から移住してきた人たちは、連絡協議会に加わったり、NPO法人を設立したりして島づくりに参加している。

9つの島にまたがる広い地域の中で交通が不便ではあるが、リーダーや関係機関の支援の下、新しい考えや力も取り入れながら、島民が連携・協力して島づくりに取り組んでいる。

2. 農業生産面における特徴

(1) 柑橘栽培などの農業と漁業の取組

島の基幹産業である柑橘栽培の中心である伊予柑や温州みかんについては、安定した収量確保や単収増大のために、緩傾斜地や平坦地のほ場への誘導や低樹高化、園地の若返りなどを進めている。

松山市の「まつやま農林水産物ブランド」に認定されている「せとか」、「カラマンダリン」、「紅まどんな」など人気の中晩柑類は、果皮が薄く従来の機械では選果できないために面積拡大が難しかったが、平成22年に

農協が補助事業で低段差式ラインの選果機を導入したことによって、機械選果が可能となり、作付面積の拡大が期待される。また、酸味が強くて出荷できなかった時期のカラマンダリンを貯蔵することにより、酸味が抜けて出荷時期も延長され、高値で販売できるようになっている。

農家は、専業農家の割合が高く、認定農業者も多い。販売農家の平均販売額は300万～400万円であり、その維持・向上を目指している。

漁業では、経験を活かした遊漁案内やぼっちゃん島あわびの養殖への取組、築いそや種苗放流による漁業生産力の回復などに取り組んでいる。ひじきの養殖や加工も各島で行っているが、これらの取組の一部には離島漁業再生支援も活用している。

(2) 市内の定期市やイベントへの出店によるPRと販路開拓

島で生産される農水産物のPRや販路開拓のため、市内の定期市やイベントへの出店等を行っている。出店先は、道後温泉で毎月開かれる朝市や農林水産祭りなどの四国本島で開かれるものが中心であるが、里島めぐりのウォーキングやクルージングなどで島を訪れた観光客が帰りの船待ちをしている間にも特産市を開いている。



写真4 道後の朝市での販売

最近では、サッカーのJ2に所属する地元チームのホームゲームでの販売などもしているほか、市内中心部にあるJAの直売所、市内の道の駅、島最大の港である中島大浦港の待合スペースなどでも販売している。

(3) 中山間地域等直接支払制度と離島漁業再生支援制度の活用

安居島を除く島の集落では中山間地域等直接支払に、中島、興居島及び野忽那島を除く島の集落では離島漁業再生支援に取り組んでいる。

農道や水路の管理、周辺林地の下草刈り以外にも鳥獣害対策や土壌流亡防止に取り組む集落もある。また、海岸や海底の清掃、水質検査、山林の維持管理、水産加工品の開発、施設整備、イベントへの出店等、環境整備だけでなく所得向上のための取組も行われている。

(4) 食事メニュー開発による効果

しまはくを契機として、いくつかの「食」が誕生した。島のみかん果汁で炊いたご飯に特産の島あわびを添えた「忽那水軍カレー」、クルージングやウォーキングなどのイベント時に提供する、鯛めし・タコめしにサザエ・アワビ等の島の海産物のおかずを添えた島ごとに特色のある「しまめし弁当」などが代表的である。

興居島の体験メニューで始まった手づくりの石窯で焼くピザは、他の島に広がり、地元産食材をふんだんに使ったメニューに成長している。

他にも、島で栽培される柑橘の品種ごとのジュースを作っており、生食用として出荷できないものの有効利用を図っている。

(5) 島で活動するNPO法人

忽那諸島では、いくつかのNPO法人が独自の視点で活動している。例えば、平成23年に地元の若者が設立した「輝け中島」は、定住促進や耕作放棄地解消、イベント実施による活性化に取り組んでいる。みかんの収穫体験やトライアスロン中島大会のボランティアを通して、地元の独身男性と島外の独身女性をマッチングする婚活イベントを開くとともに、耕作放棄地を借り受けて農地として再生し、野菜を栽培して農協を通じて出荷している。その他、子供のスポーツイベントを開いて島に賑わいをつくり出している。

一方、首都圏などからのIターン者が平成24年に設立した「農音」は、園地を借り受け、みかん農家に師事しながら自分たちの農園を広げている。生産物の販路は、主にSNSを活用して広げているが、その他にも島へ移住する前の東京のメンバーが知人や行きつけの飲食店に売り込むなどしている。これらの取組には、地元の農協や生産者も関心を寄せている。



写真5 農音のホームページトップ

また、考えを同じくする人たちを島へ移住させるプロジェクトを行っており、移住者のために住宅や農地の借受けに関する相談にも乗っている。現在14人が移住しており、さらに何人もの移住希望者が控えている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 交流事業(しまはく、里島めぐり)の取組による意識の変化

しまはくの体験メニューは、島の宝(自然・文化・産物・食など)をありのままに体験するものだったが、島民がメニューを考える際に背中を後押ししたのは、島外の間人である市職員の「島民にとっては当たり前でも島外の人にとっては新鮮で魅力的である」という言葉であった。

そのようなことや、島を訪れるお客さんやIターン者やUターン者などの言葉や提案を聞きながら、島民は島の魅力を再認識するようになった。

(2) 島の生活の利便性向上

睦月島では、観光客などが食事をする店が今までなかったが、体験イベントの実施をきっかけとして、有志の力によって店舗を開業した。今では

新鮮な魚介類が食べられる店として人気を集めており、島民にとっても冠婚葬祭や地域行事での仕出しを島外から取り寄せる必要がなくなって利便性が向上している。また、しまはくなどを契機に開発された食事メニュー（しまめし弁当、ピザなど）は、島民も利用するようになっている。

（３）環境美化の取組

交流活動によって島外の人が多く訪れるようになり、イベントや体験メニューの会場だけでなく、そこに至る道沿いに花を植えたり草刈りをしたりするなどの環境美化活動を行っている。

また、里島めぐりのウォーキングイベントには、ただ歩くだけでなく海岸清掃を行うものもあり、住民たちだけでは難しい多くの人手が必要な広範囲の環境美化活動により、美しい島を残そうという気持ちを参加者に感じさせている。

（４）島の後継者の育成

しまはく、里島めぐりなどの交流事業、その他の機会でも島を訪れる人たちの中には、島に魅力を感じてIターンする人も現れている。

例えば、安居島で漁家民宿や漁業を始めた家族、中島で民宿を譲り受けて始めた夫婦、同じく中島で柑橘栽培を始めた農音の若者など、直近5、6年で判明しているだけで20名以上に上る。

連絡協議会やNPO法人などの組織も設立されており、徐々にではあるが島の後継者になる人材が育っている。



写真6 漁家民宿を始めた家族

（５）体験型修学旅行誘致の効果

市では、道後温泉などと連携し、県内の自然や産業を体験できる魅力的な体験交流メニューを選べる修学旅行を県外の学校に提案して平成18年度から誘致をしている。

体験メニューには、中島でのみかん収穫や釣りの体験が位置付けられており、島の農家や漁師、児童生徒の協力の下で実施されている。体験には住民との交流も含まれており、参加した学校からも高い評価を得ていることから、当初訪れる学校数は年間一桁だったが、現在は50校を超えている。修学旅行の誘致によって、訪れた児童生徒は島の魅力を感じることができ、島民は元気をもらっている。